# 高句麗・百済の王陵付属寺院

## はじめに

平壌市郊外の定陵寺と扶余の陵山里寺址は、それぞれ高句麗王陵、百済王陵に付属する寺院と見られ、比較研究が可能な点でも注目される遺跡である。ここでは主に、考古学的な面から両寺址をめぐる調査研究の現況を概観し、若干の私見を述べたい。

## 1　平壌・定陵寺

平壌は高句麗後期（427～668年）の首都が置かれたところである。定陵寺は、平壌の中心部から東南約22㎞、平壌特別市力浦区域戊辰里に所在する。背後に伝東明王陵を中心とする古墳群をひかえる。寺址は1974年に大規模な発掘調査がおこなわれ、1976年に報告書が刊行された。

寺址の全体規模は東西約223m、南北約133mで、伽藍は、中枢部に八角形建物を中心とする区画、その両側に２区画づつ、合計５区画の建物群からなる。中央の区画には、塔とみられる八角建物、その左右には南北棟を配置し、北側は回廊を挟んで、東西棟があり、塔を中心にした一塔三金堂の配置とされた。寺名は土器の刻字「定陵」、「陵寺」による。報告書では伽藍配置が左右対称性を欠くことから、清岩里廃寺（三国史記498年の記事にみえる「金剛寺」とみなす）より古いとし、三国史記392年の記事「創九寺於平壌」にみえる九寺よりは新しいとした[1]。

このような定陵寺の報告に対しては、いくつかの紹介・考察がなされているが、一塔三金堂式とされる伽藍配置の問題や、報告された各堂塔の造営に時期差が存在しないのかなど、多くの疑問も表明されている[2]。

**定陵寺報告書刊行以後の見解**　報告書以後の見解を紹介しておこう[3]。まず、定陵寺の平面構成にかんして宮殿建築の性格を帯びているとし、具体的には高句麗宮殿とみなす安鶴宮遺跡との共通点をあげる。つぎに、定陵寺の遺構には第一次建築と第二次建築の二つの文化層があるとする。瓦との関連では、青灰色瓦に対応するのが宮殿的な建築からなる第一次建築で、八角形塔を中心とする寺院建築の第二次建築は赤色瓦に対応するとした。

第一次建築の年代に関しては、安鶴宮遺跡よりは遡るとして、西暦323年に設けられた高句麗の烽上王の別宮だと結論する。第二次建築は、498年造営の金剛寺とみなす清岩里廃寺を基準として、これよりはるかにさかのぼり、金堂と塔の規模の比、瓦の種類の数、東明王陵の問題などをも考慮して、４世紀末、三国史記392年の記事「創九寺於平壌」にみえる九寺の一つとする。

考古学的には、遺跡の層位の所見との関係が重要であり、如上の二つの文化層の指摘は注目せねばならない。伽藍の東方外で新たに検出された八角井戸内の高句麗時代の堆積層に、青灰色瓦の層と、その上の赤色瓦の層があるとし、前者は「行宮」、後者は「定陵寺」に該当すると述べているのがこれと関連するかとも思われるが、伽藍遺構の層位との関連は記述がみあたらず、文化層にたいする理解は困難といわざるを得ない。

また、遺跡の年代観の重要な資料とされる瓦のうち、「青灰色瓦」に対比されるのは安鶴宮遺跡の瓦であるが、この瓦は私見では高句麗時代ではなく、高麗時代に降るとみるべきであり、こうした比較には根本的な疑問がある[4]。

## 2　扶余・陵山里寺址

百済後期（538～660年）の首都であった忠清南道扶余郡の市街地の東方約４㎞、扶余羅城と陵山里古墳群との間の谷間から新たに発見された寺院遺跡で、1992年から1997年の第５次調査までの調査成果が刊行された[5]。

伽藍は、南から中門、塔、金堂、講堂を南北一直線に配置した一塔式伽藍である。中門と講堂間で約62m、東西回廊間は約48mの規模である。塔心礎上から出土した石製舎利龕の銘文により、塔の発願が567年であることが分かり、聖王の菩提を弔う寺院として創建されたとみられている。寺名は不詳である。

高句麗時代の定陵寺につづいて、百済の地でも王陵付属寺院が発見され、注目をあびることになる。

**陵山里寺址に対するその後の見解**　陵山里寺址の調査は、その後も続き、2002年までに第６～８次調査が実施され、伽藍中枢部の南方で、新たに木簡も出土している。ここでは、先の報告書刊行以後になされた瓦の検討の成果を紹介しておこう[6]。即ち、軒瓦の形式毎の出土地点との検討によると、まず造営されたのは、講堂、塔、東回廊北端建物であり、遅れて金堂が造営され、さらに東回廊、南回廊は相対的に遅れたとみられている。従来知られている古代寺院堂塔の造営順序との違いが指摘されていることは遺跡の性格とも関わり、重要である。

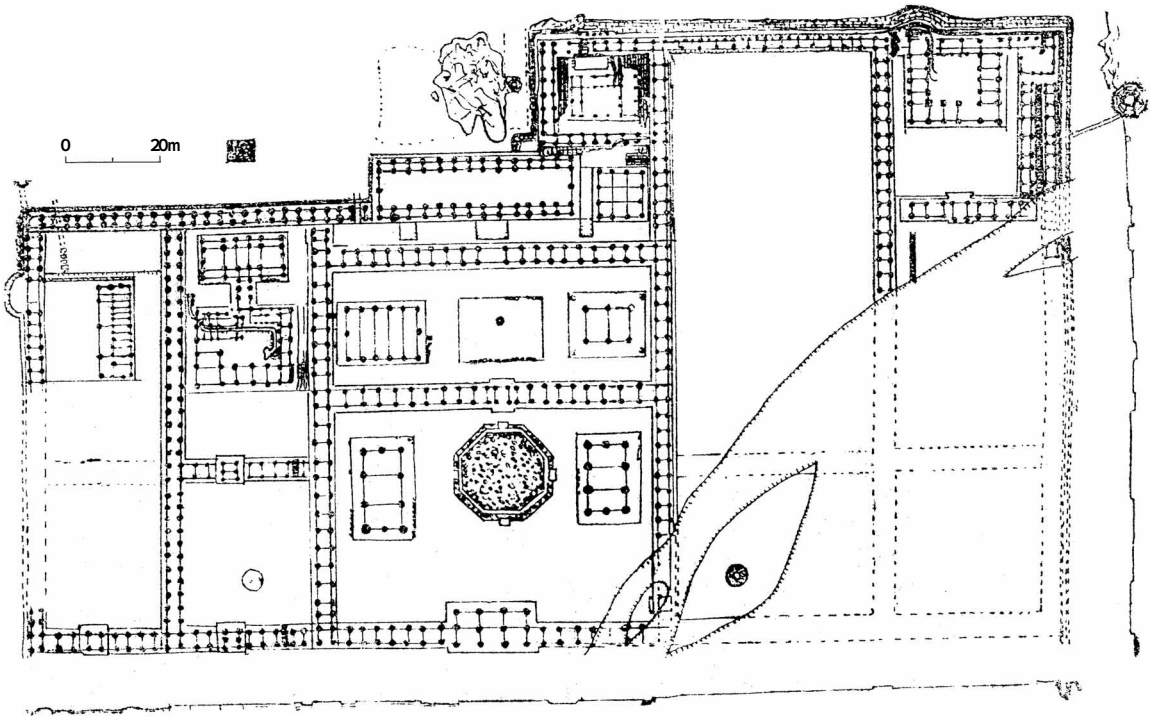


図21　平壌・定陵寺遺構配置図（注３による）

## おわりに　－今後の課題－

定陵寺に関しては創建の事情、年代と密接に関連する問題のひとつに伝東明王陵の真の被葬者比定の問題がある。陵山里寺址は、王陵全体を対象とする性格を合わせもっていた否かなども興味ある課題であり、かつて王室の祈願寺院的な性格が指摘された扶蘇山寺址との関連にも関心がもたれる。

層位の検討を通じた考古学的資料の解釈がこの問題を解く重要な鍵となる。今後の詳報に期待しておきたい。

（謝辞）陵山里寺址の近年の調査・研究状況について国立扶余博物館李炳鎬氏のご教示を得た。謝意を表する。

（千田剛道）

**注**

1）金日成総合大学、1976年、『東明王陵とその付近の高句麗遺跡』金日成総合大学出版社。
2）建築史の面から詳細に検討を加えた研究に金正基、1991年、「高句麗定陵寺址および土城里寺址発掘報告概要と考察」『仏教美術』10、東国大学校博物館、がある。
3）チョン・ジェホン、1994年、『東明王陵に対する研究』社会科学出版社、に掲載された見解による。
4）安鶴宮遺跡を高麗時代の遺跡とみる考えは、千田剛道、1996年、「高句麗・高麗の瓦－平壌地域を中心として－」『朝鮮の古瓦を考える』帝塚山考古学研究所および、同2005年「高麗の瓦－平壌と開城の比較を中心にして」『高麗開城の文化遺産的価値と保存』イコモス韓国委員会。
5）国立扶余博物館・扶余郡、2000年『陵寺－扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書－』。
6）李炳鎬、2007年、「扶余陵山里出土木簡の性格」『2007年韓国木簡学会第１回国際学術会議－韓国古代木簡と古代東アジア世界の文化交流－』。

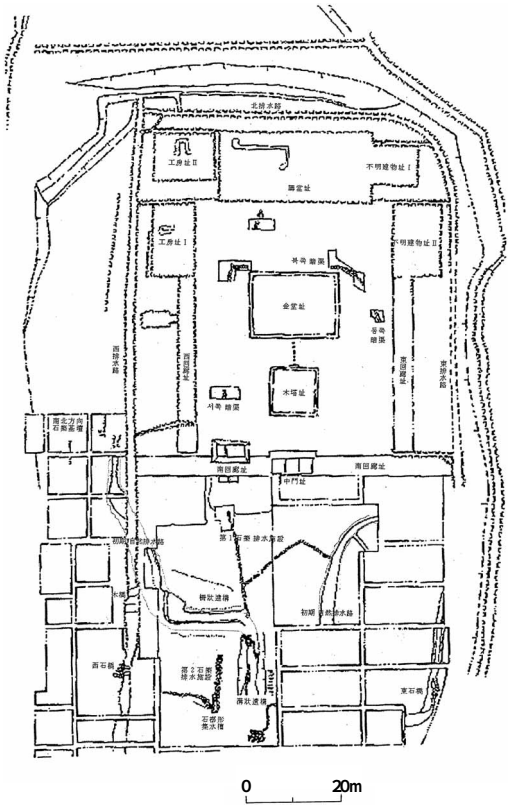


図22　扶余・陵山里寺址遺構配置図（注６による）